「アジア・キリスト教・多元性」研究会
第20号　2022年3月　33～53頁

# 朝鮮における華僑プロテスタント建設請負業者による ミッション関連建築施工
## ―ソウル地域のハリー・チャンと王公温を中心に[1]―

李　恵源

## 1．はじめに

1884年に海外の宣教団体が朝鮮に入って宣教活動を開始して以降、全土に広がった宣教ステーションには、教会・学校・病院・宣教師宅などのいわゆるミッション関連の建物が建てられていった。初期においては朝鮮式家屋を改築して使用していた宣教部は、1890年代からは西洋式の建物を建てはじめたが、これは旧韓末に都市の様相が変化する上で大きな影響を及ぼした。

建築は、建築を依頼する建築主、設計図を描く人、その設計図にそって工事を指揮する現場監督、そして現場監督の指揮のもと施工を行う請負業者（施工主）の四つの主体が有機的に結びつく中で成り立つ。このうち、建築史は設計者や現場監督、設計図などに関心を払い、都市史は建築を通しての都市の変化に、教会史は建築を依頼した建築主、すなわち宣教部・教会・キリスト教機関などに主な関心を置く。しかし、現場において建物を建てるために数カ月から数年間にわたって実際に汗水を流す請負業者については、建築史、都市史、教会史などの分野において全般的に関心が払われてこなかったのが実状である。

朝鮮近代のミッション関連の西洋式建築物の施工との関連で、19世紀末から20世紀初めにかけて朝鮮で活動した宣教師たちの文書には、「ハリー・チャン」（Harry Chang）という中国人の建設請負業者の名前がよく登場する。中国と密接な関係を持つ中で1930年代から40年代を過ごした方之日牧師（1911～2014年）は、日本の植民地支配時代にソウルに建てられた大型建築物のうちの多くが中国人によって施工されたものであると回顧しており、その中でも「王公温長老」が中心的な人物であったと述懐している[2]。

本論文は、旧韓末の19世紀末から日本の植民地支配時代にかけてソウルのミッション関連の建築物を多く施工したことで知られるハリー・チャンと王公温という二人の中国人建設請負業者に対する学問的な関心から出発している。すなわち、彼らが実際に関わったミッシ

[1] 本稿は『韓国基督教와 歴史』第54号（2021年３月）に韓国語で掲載されたものを加筆・修正および翻訳したものである。

[2] 「方之日牧師インタビュー録音記録」（インタビュアー：旅韓中華基督教漢城教会 劉傳明牧師・李恵源、場所：ソウル市江西区登村洞、日時：2012年４月27日午前９時～10時15分）、11頁。

ョン関連の近代建築物がいかほどになるのかを見定めると共に、特にキリスト教徒という彼らに共通する宗教的アイデンティティおよびプロテスタント宣教部との関係が彼らの建築活動に及ぼした影響について明らかにすることを目標とする。

このことに関連した先行研究を見ると、朝鮮近代のミッション関連の建築に関して歴史的アプローチを採る研究は、1966年に尹一柱によって朝鮮近代建築史が本格的に扱われて以来、右肩上がりに増えていった。尹一柱は、開国後に朝鮮に建てられた西洋式建築物についての最初の歴史学的研究を行っているが、その研究対象にカトリックやプロテスタントが建てた建築物も含めている[3]。しかし尹仁石も指摘しているように、植民地時代の朝鮮において刊行されていた唯一の建築雑誌『朝鮮と建築』には日本の建築家たちの活動のみが記録されており、西洋の宣教師が設計したり、関わったりした建築物に関する情報を探しだすことは困難であった[4]。したがって、その後の数十年間、ミッション関連の建築に関する研究は、尹一柱の研究を大きく超え出ることはなかったが、1990年代に入って次第に教会内部の資料を用いる研究が登場しはじめた[5]。

そのうちのカトリック関連の建築に関しては、金正新の研究が優れている[6]。金はカトリックの聖堂の洋式受容と変遷、設計者と設計上の特徴について詳細に研究しているが、特に日本の雑誌には見いだせない聖堂の設計者に関連した資料として教会内部の資料を活用している。

一方、プロテスタント関連の建築に関しては、鄭昶源の研究が注目に値する[7]。鄭は、日

---

[3] 尹一柱『韓国 洋式建築 80年史：洋式建築 流入과 変遷에 関한 研究』治庭文化社、1996年；同「1910~1930年代 二人의 外人建築家에 대하여」、尹一柱教授論文集編纂会編『韓國近代建築史研究』技文堂、1988年など。

[4] 尹仁石「韓国における近代建築の受容及び発展過程に関する研究－日本との関係を中心として」東京大学大学院工学系研究科博士学位論文、1990年、96頁。尹仁石はその論文において、「ミッション系統の建築」との章を設け、ミッション関連の建築についての考察を行っている。

[5] 1990年代以降、建築史分野の研究としては、도선봉 외「開化期 韓国 改新教会 建築의 形成에 대한 研究」『建設技術論文集』第16輯第1号（1997年6月）、153-166頁；최성연 외「韓国 教会建築의 時代区分과 그 特性에 関한 研究」『建設技術論文集』第16輯第1号（1997年６月）、167-180頁；신지섭「韓国近代建築에서 西洋人宣教師에 의해 지어진 学校建築의 様式的 特性」延世大学大学院建築学科碩士学位論文、2006年などがあり、教会史分野の研究としては、이정선「日本의 建築宣教師 보리스의 生涯와 思想研究」監理教神学大学校大学院歴史神学碩士学位論文、2006年；옥성득「初期 韓国 改新教 礼拝堂의 発展 過程과 特性：基督教의 近代性과 土着化 問題、1885-1912」『東方学志』141巻（2007年）、267-321頁；박종현「韓国改新教 建築史의 神学的 批評」『大学과 宣教』第28輯（2015年）、165-193頁などがある。

[6] 金正新「韓国 가톨릭 聖堂建築의 受容과 変遷에 관한 研究」서울大学校大学院建築学科博士学位論文、1989年；同『韓国 가톨릭 聖堂 建築史』韓国教会史研究所、1994年；同「芬道会와 韓国 近代 建築」『教会史研究』第33輯（2009年12月）、477-507頁；同「韓国과 日本의 初期 天主教会 木造聖堂建築에 관한 比較研究」『大韓建築学会論文集 計画系』第28巻第2号（2012年２月）、139-147頁など。

[7] 鄭昶源「韓国ミッション建築の歴史的研究」東京大学大学院工学系研究科博士学位論文、2004年。

本の総督府関連資料をはじめ、宣教師が刊行していた雑誌や教団別の年次会議録などの宣教師関連資料を用い、韓式・韓洋混合式・洋式など教会建築様式の変遷をはじめとした建築関連の情報を詳細に追っている。鄭は特に設計者ではない「ビルダー」、すなわち建設請負業者についても節を設けて取り扱っているが、その中でミッション関連の建築に多く関わった中国人請負業者である慕文序、ハリー・チャン（Harry Chang）、王公温の３人については、写真を含め２ページ程度の分量をそれぞれに割いて紹介している。これは、韓国の建築史研究において中国人建設請負業者を取り扱った最初の研究であるという点で意義を有するが、特に本論文の研究対象でもあるハリー・チャンに関しては、その名前が言及されている様々な記事を*The Korea Mission Field*（以下、*KMF*）に見いだし[8]、チャンがプロテスタント信者であったという事実やセムナン教会の建築に関わっていた事実を明らかにした。王公温についても*KMF*の記事やいくつかの二次資料に基づき[9]、王が関わった工事に京城聖書学院や大韓基督教書会、泰和女子館などがあることを明らかにしている。

これら二つの研究に基づき李正熙は、朝鮮華僑史の観点から中国人建設請負業者についての初めての専門的な研究を行っている[10]。李は、『ミューテル司教日記』や『ドマンジュ司教日記』などの教会側の資料および朝鮮総督府資料を用い、カトリックの聖堂建築に関わった王ペトロや陳ペトロ、姜義寛、慕文錦などの華僑建設請負業者らの活動について研究している。

最も新しい研究としては、朝鮮近代都市史の観点からハリー・チャンを含む中国人建設請負業者が19世紀末から20世紀初めにかけてソウルや済物浦といった都市の変貌に及ぼした影響について研究した論文がある[11]。著者であるコーノゲイ（Nate Kornegay）は、特にプリンストン神学校が所蔵する未発表の史料を多数発見し、中国人の建設請負業者が日本人や朝鮮人の業者と比較して優位な立場にあった事実を詳細な形で明らかにしている。特にハリー・チャンに関しては、朝鮮に入国した過程や大工工事業を始めるようになった経緯などに

---

[8] “Notes from the Stations,” *KMF* (July 1910), 162; “Dr. H. G. Underwood's Annual Report,” *KMF* (Nov. 1910), 284; “How the Lord Sent Money for the YMCA,” *KMF* (Feb. 1911), 54; “By Their Works Ye Shall Know Them,” *KMF* (April 1911), 103など。

[9] Mrs. C. S. Deming, “Sen Lai Tsang, Missionary to Korea,” *KMF* (April 1937), 83; 『旅韓中華基督教創立九十週年紀念特刊：知恩・感恩・報恩、1912-2002』旅韓中華基督教連合会、2002年；이덕주『泰和基督教社会福祉館의 歴史、1921-1993』泰和基督教社会福祉館、1994年など。ただし『旅韓中華基督教創立九十週年紀念特刊』は、歴史研究書ではない関係上、年度や名前、地名などの事実関係に多くの誤記があるが、それらがそのまま資料批判を経ずに鄭昶源の研究に反映されている点を指摘しておきたい。

[10] 李正熙「朝鮮 華僑의 聖堂建築 施工活動(1880年代~1930年代): 서울과 大邱를 中心으로」『教会史研究』51（2017年12月）、43-84頁。

[11] Nate Kornegay, "The Life and Times of Harry Chang: Builders in Early Modern Korea (1880s-1910s)," https://colonialkorea.com/2019/11/04/the-life-and-times-of-harry-chang-builders-in-early-modern-korea-1880s-1910s/?fbclid=IwAR19SkV1xO3z_hMoelhkf_o2LPV7WPoJ9d37yT5DJjcLW9Wwou4GXijUwOg.（2020年4月10日参照）

ついて明らかにした。

現在まで朝鮮華僑の建設請負業者であるハリー・チャンや王公温に言及した論文は、上記の三編のみである[12]。しかしながら、鄭昶源は建築の特徴に集中し、李正熙は大邱カトリックの建築に集中しており、ハリー・チャンと王公温についてはあまり関心を傾けていない。またコーノゲイの論文についても、著者自身が明らかにしているように、ミッション関連の建築と関連した内容はほぼ省き、特にハリー・チャンの実名や社名などハリー・チャンに関する歴史的事実を明らかにしえていない点などがその限界として指摘できるであろう。

本論文は、ハリー・チャン（1900～1910年代）と王公温（1920～1930年代）の信仰と建築活動について考察することを通して、華僑プロテスタントの建設請負業者が朝鮮のミッション関連の建築に及ぼした影響について明らかにすることを目的とする。なお、本論文では、先行研究においても用いられていた朝鮮総督府の記録や宣教師たちが刊行していた雑誌を参照すると共に、新しく発見した日本の建築関連の資料や在朝宣教師の報告書および個人の記録などを用いる。

## Ⅱ．宣教初期の華僑建設請負業者とミッション関連の建築施工

朝鮮に西洋の建築様式が入った経路は、大きく分けて四つある。第一に外国公館関連の建築、第二に宣教師による宗教建築および関連施設の建築、第三に外国商社の建物および住宅、第四に日本人による官庁および公共施設の建築である[13]。そのうちの特に宣教師によるミッション関連の建築は、日本を経た和洋折衷式ではなく、西洋建築の直接的な紹介および拡張であったという点において建築史的な意義を有するとの評価を受けている[14]。このような初期の西洋式建築物は、1890年代から本格的に建てられはじめたが、初期においては主にレンガが用いられていたため[15]、西洋式のレンガを扱ったことがなく、また西洋建築についての理解と技術を欠いていた朝鮮の職人に代わって日本人あるいは中国人の建設業従事者が西洋式建築物の施工を担うようになったことは、ある意味当然のことであった。このように、宣教初期に建設された西洋式建築物の場合、その大部分が西洋人によって設計および監督され、施工は日本人あるいは中国人が請け負っていた[16]。

そのような中、プロテスタント宣教師たちが宣教初期から日本人ではなく中国人の建設請

---

[12] このほか研究書ではないが、王公温について言及した文章としては、次のような二編の回顧録がある。吳學古「簡述王公温度長老遺事」、旅韓中華基督教連合会篇『旅韓中華基督教会百年紀念特刊：1912-2012』旅韓中華基督教連合会、2013年、16-17頁；同「漢城中華基督教会簡史」、旅韓中華基督教連合会編『旅韓中華基督教会百年紀念特刊：1912-2012』、60-61頁。

[13] 金正新『韓国 가톨릭 聖堂 建築史』、26頁。

[14] 尹仁石「韓国における近代建築の受容及び発展過程に関する研究」、83頁。

[15] 金正新『韓国 가톨릭 聖堂 建築史』、27頁。

[16] 金正新『韓国 가톨릭 聖堂 建築史』、27頁；鄭昶源「韓国ミッション建築の歴史的研究」、208頁。

負業者に大きく依存していたことは、多数の宣教師資料を通して確認することができる。たとえば、1900年に中国で義和団運動が起こると、当時朝鮮に居住していた中国人たちが家族の安全を確認するために一斉に故郷に戻るという出来事が起こったが[17]、米国南長老教会所属の宣教師として群山で活動していたドゥルー（A. Damer Drew）と全州のオーウェン（Clement C. Owen）は、中国人たちが突然出ていってしまったため、自宅および宣教関連の建設に大きな影響を受けざるをえなくなったことを次のように記している。

> 多くの中国の働き手が中国に戻っていき、私たちは家を建てる建設業者を見つけることができないでいます。医師であるドゥルーは、これまでいかなる建設業者とも契約ができておらず、私の家の修理も宙に浮いたままの状態です。いつ再び工事を始めることができるのかわかりません[18]。

また、1906年から元山や松都などにおいて米国南メソジスト監督教会の宣教ステーションの建設を任され、朝鮮で活動していた建築家のトンプソン（J. A. Thompson）は、建設現場においていつも熟練した中国人たちと仕事をしていたと回顧している。彼らのうちの一部は、キリスト教徒となっていた[19]。地方においてだけでなく、当時のソウルにおいても宣教師関連の建築物の施工を中国人たちが請け負っていたということは、1908年に鍾路の基督教青年会館（YMCA会館）建築の現場監督を担うために朝鮮に赴いていた日本の建築技師である金子政太郎の記録にも見つけることができる。

> 外人の經營に關する工事は大概彼等の手に成つて我同業者の請負うものは殆んど無い、彼等は慥に外人の意に投じて深い信用を博しつゝあるのである〔中略〕外人には厚き信用を得て彼等は益々其の精神を發揮し殆んど邦人の經營を除いて韓國の工事は彼等の手中のものである[20]

ここに登場する「外人」の中にプロテスタント宣教師たちが含まれていたことは言うまでもない。そうだとすれば、なぜ宣教師たちは、この金子の指摘にあるように、日本人ではなく中国人の建設請負業者を好んだのであろうか。

金子は、中国人の建設請負業者と職人の長所に言及しているが、その中には次のような四

---

[17] 『帝国新聞』1900年6月28日、3頁。

[18] C. C. Owen's letter to Aunt Nannie (Sept. 20, 1900), *Personal Reports of the Southern Presbyterian Missionaries in Korea*（韓国基督教歴史研究所所蔵の影印本）、第1輯第12巻、1頁。

[19] Anna R. Thompson, "A Constructive Retrospect: Six and a Half Years of Building Work in Korea," *KMF* (Sept. 1914), 274-275.

[20] 金子政太郎「韓國に於ける工事上の清人（二）」『建築世界』第２号第10号（1908年）、21-23頁。

つが含まれていた[21]。第一に請負業者と職人たちは１～２年ほどの長期の雇用契約を結び、身分が安定していること、第二に日本の請負業者の中には「金筋連なる悪徒」が存在するのに対して、中国人の請負業者にはそのような悪習がまったくないこと[22]、第三にどの中国人の職工に会っても、金銭的な利害に固執することなく、自分の仕事に対して非常に誠実であること[23]、第四に中国人の職人の賃金が日本人の３分の１程度の低廉なものであったことである。その結果、外国人だけでなく、日本人の実業家たちの中にさえ、中国人の請負業者に工事を任せようとする者がいるとしている[24]。

このような評価は、1920年代から30年代にかけても続いたが、建築業界において共通して指摘されていたことは、中国人職工は仕事がよくでき、誠実であるが廉価であるということであった[25]。このような肯定的な評価は、宣教師の記録にも見つけることができる。先に言及した南メソジスト監督教会のトンプソンは、中国人が優れている理由について、「中国人たちは、朝鮮に宣教師が入ってくる二、三世代前から西洋建築の仕事に慣れ親しんできたが故に熟練しており、日本人と比較して価格が低廉であった」[26]としつつ、中国の職人たちの実力を高く評価していた。

このように、価格・能力・誠実性の面で競争力を備えた中国人の請負業者は、宣教の初期である1900年代と1910年代に、ミッション関連の建築において中枢的な役割を担った。1912年に朝鮮中華基督教会を設立したイーディス・デミング（Edith M. Deming）宣教師は1919年に、「〔朝鮮中華基督教会教会員の〕大工や石工は数年にわたって外国人や朝鮮人のために宣教会の家や教会堂や礼拝所を建てることに従事」してきたと述べているが、このことも、中国人がミッション関連の建物の建築において大きな役割をなしていたことを示している[27]。

1924年に朝鮮総督府は、朝鮮に住む中国人に関する調査の結果を出版している。そこでは、第一次世界大戦以前のソウルにおける中国人の「土木建築請負業」について、「東成號〔経営者：張時英〕・雙興號〔経営者：慕文序〕・長發隆〔経営者：劉銀生〕・黄昇號〔経営者：林嘉亭〕の如き有力にして信用あるものが」あるとし、「外国人の建築工事は殆ど是

---

21 金子政太郎「韓國に於ける工事上の清人（一）」『建築世界』第2巻第9号（1908年）、12頁。

22 金子政太郎「韓國に於ける工事上の清人（一）」、14頁； 同「韓國に於ける工事上の清人（二）」、21頁。

23 金子政太郎「韓國に於ける工事上の清人（二）」、21頁。

24 金子政太郎「韓國に於ける工事上の清人（二）」、23-24頁。

25 大和田臨之助「社會現象雜觀」『朝鮮土木建築協會會報』第131号（1929年1月）、19頁；李覺鐘「朝鮮人の勞動能力」『朝鮮土木建築協會會報』第133号（1929年2月）、15頁；大和田臨之助「中華勞工協會と朝鮮勞動者」『朝鮮土木建築協會會報』第144号（1930年1月）、7-8頁などを参照。

26 Thompson, “A Constructive Retrospect,” 272.

27 셈잉 부인「죠션경셩 즁화인 긔독교회」『基督申報』1919 年 1 月 29 日、3 頁。

等四商店の獨占とも云ふべく現に外國人經營の教會・學校・病院等の建築は支那人〔ママ〕請負業者の請負に係るものが多い」と記している[28]。

以上のような宣教師や朝鮮総督府の記録を通して知ることができることは、1900年代と1910年代のソウル地域のミッション関連建築施工は、東成号、雙興号、長発隆、黄昇号という四つの華僑建設請負業者がほぼ独占していたということである。

## Ⅲ．ハリー・チャンの信仰と建築活動

このように、宣教初期の1900年代と1910年代に宣教師たちに信頼され、多数のミッション関連の建築を請け負って施工した中国人のうち宣教師資料において実名を確認することができる人物としては、譚字真、慕文序、ハリー・チャン（Harry Chang）らがいる。彼らのうち譚字真は、1911年に鍾路に建築された聖書公会の聖書会館の建築を請け負い、２階建ての建物を施工したとの記録が残っている[29]。慕文序の場合は、先述した雙興号の経営者であり、1912年には安洞教会の礼拝堂を建築し[30]、1928年における平壌の崇実専門学校の校舎拡張の際に施工を担当したことなどを確認することができる[31]。

しかしながら、様々な宣教師の文書に最も頻繁に登場する中国人の建設請負業者は、ハリー・チャンであった。現在のところ、ハリー・チャンが施工したミッション関連の建物として宣教師文章にその名を確認することができるのは、先行研究でも言及されているように南大門のセブランス病院（1903年）[32]とアンダーウッド宣教師宅（1904年）[33]、鍾路の基督教青年会館（1908年）、セムナン教会（1910年）だけである[34]。しかし、いかに宣教師たちがハリー・チャンと多くの仕事を行ったかについては、*KMF*の1911年４月号の表紙にハリー・チャンの写真が掲載され、彼の寄付活動と建築活動に対して心の籠った紹介がなされていることからも明らかである。そこでは、次のように記されている。

> 彼の名は、私たちの教会や家、学校のうちのよい部類の大多数と結びついている。私たちは、彼がなす公正な取引や信頼の置ける仕事ぶりだけでなく、彼が持つ兄弟愛の故に彼を頼りにすることができます[35]。

---

[28] 朝鮮総督府『調査資料第七輯：朝鮮に於ける支那人』1924年、60-61頁。

[29]『大韓聖書公会史　1：組織・成長과 受難』大韓聖書公会、1993年、356-357頁。

[30]『安洞教会90年史』大韓예수教長老会安洞教会、2001年、72-73頁。

[31]『朝鮮と建築』1928年3月号、138頁；尹一柱『韓国 洋式建築 80年史』、112頁。

[32] O. R. Avison, “Building the Severance Union Medical College and Hospital,” *Dr. Avison's Memoirs* [c.1940-1941], 439（Nate Kornegay, “The Life and Times of Harry Chang”より再引用）。

[33] Lillias H. Underwood, *Underwood of Korea* (New York: Fleming H. Revell Company, 1918), 226-227.

[34] 全澤鳧『韓国基督教青年会 運動史』정음사、1978年；H. G. Underwood, “Annual Report,” *KMF* (Nov. 1910), 286.

[35] “By Their Works Ye Shall Know Them,” 103.

この記述だけを見ても、1911年までにハリー・チャンが担当した教会や宣教師の自宅、ミッション・スクールの工事が少なくなかったことが推測される。ところで、ここで一つの疑問が生じる。宣教師文書に「ハリー・チャン」として登場するこの中国人建設請負業者の本名は何かという疑問である。

上記の*KMF*の文章をはじめとする宣教師文書を通して知るこができる「ハリー・チャン」に関する手がかりは、第一に姓が「チャン」（Changなので、張または章）であったということ、第二に建設請負業者であったということ、第三に数多くのミッション関連の建物を建てたこと、第四に「同種の業界の中で第一位の座を占」めていたこと、第五に1888年から89年の間に朝鮮に渡ってきたということ、第六にかなりの富豪であったということなどである[36]。1910年代にこのような条件を満たし、活動していた華僑建設請負業の経営者とは誰のことだったのであろうか。

最初の三つの手がかりとの関連においては、先に触れた朝鮮総督府による1924年の調査内容が重要である。総督府の記録によれば、第一次世界大戦以前、すなわち1914年以前の朝鮮には外国人の建築工事を独占していた四つの華僑施工会社があった。ハリー・チャンの会社は、その四つのうちの一つであった可能性が非常に高い。その四つの会社のうち、経営者の姓が「チャン」であるのは東成号だけであり、その経営者の名前は、張時英であった。また日本の信用評価機関である商業興信所の1915年度および1917年度の調査によれば、東成号の資産価値は、10～15万円であり、上記の四つの会社のうち最も高く、長発隆と黄昇号が１～２万円、雙興号（慕文序）が３～５千円であった[37]。このことは、ハリー・チャンの会社が1911年に「同種の業界の中で第一位の座を占」めているとの*KMF*の記述、すなわち第四の手がかりと結びつけることができる。中華民国の駐朝鮮総領事館の資料によれば、張時英が朝鮮に渡った年は光緒14年、すなわち1888年のことであった[38]。また張時英は、1910年代に３年連続で年間輸出貿易額10万元以上を記録したことのある豪商であった[39]。これらのことは、それぞれ第五と第六の手がかりと符合している。

さらに、1918年と1919年に朝鮮で出版された『神学世界』に「東成号」の広告が掲載さているが、会社名である東成請負業と経営者名である張時英、そして住所だけが表記された単純な広告に大きな文字で経営者の英文氏名が表記されている。その英文氏名とは他でもな

---

[36] “By Their Works Ye Shall Know Them,” 103.

[37]『明治大正期 商工資産信用録 大正四年（下)』第8巻（1915年）、13頁；『明治大正期 商工資産信用録 大正七年（下)』第10巻（1918年）、9頁。

[38]『駐朝鮮使館當-民國五年』(人事03-47/宗號-冊號 036-02)、5頁。

[39]『民國5年：人事02』7、15-16頁（金希信「在朝鮮 中華商会의 設立過程과 存在様式：1912-1931年 京城地域을 中心으로」『中国近現代史研究』第73輯（2017年3月）、46頁より再引用）。

い、「Henry Chang」であった[40]。「Harry」が「Henry」の愛称であることを考えれば、また広告で敢えて経営者の英文氏名を強調しているのを見ると、東成号の経営者である張時英が宣教師たちの間で広く「ハリー・チャン」として知られていた人物と同一人物であったことは明らかなように見える。

ハリー・チャンとは、小公洞に絹織物雑貨店である傅利号（1900年）と木材工場である東成木廠（1901年）を設立し、1910年代に中華商務総会および中華総商会の初代会長を歴任し、漢城華僑学校の初代校長を歴任した、1920年以前の朝鮮華僑社会において指導的な役割を担った山東登州府蓬莱県出身の華商・張時英（1856～1921年）のことだということである[41]。

ハリー・チャンではなく「張時英」の名で施工したことが確認されている建築物としては、ソウルの南部にある清国海軍提督・呉長慶の廟（1909年）[42]、ソウル寿松洞の私立淑明女子高等普通学校の校舎（1920年）、ソウル慶雲洞の天道教の中央大教堂（1921年）などがある[43]。また1924年の朝鮮総督府の記録に、張時英の東成号が「韓國王宮の工事をも營んだと云ふことである」と記されており[44]、これについては今後の研究を通して、ハリー・チャンが施工した建築物の目録に追加されなければならないであろう。

では、当時朝鮮にいた華僑の建設請負業者のうち、張時英、すなわちハリー・チャンが最も多くの売上を上げていた理由は何だったのであろうか。宣教師たちは、どうしてとりわけハリー・チャンを信頼したのであろうか。

ここで注目すべきことは、ハリー・チャンが中国のバプテスト系統の教会において信仰を持つようになったキリスト教徒であったという事実である。彼は、大々的に自らの信仰を表明してまわることはなかったが、「彼をよく知る人は皆、彼が中国のバプテスト教会に属している事実を知っていた」[45]。そして、そのような事実は、*KMF*などの雑誌を通して宣教師社会にも知られており、アンダーウッド（Horace G. Underwood）をはじめ宣教師たちは、報告書においてハリー・チャンのことを「中国のキリスト者」と呼んでいた[46]。またハリ

---

[40]『神学世界』第2巻第3号（1918年5月）、裏表紙の内側の広告欄；『神学世界』第4巻第2号（1919年3月）、広告 7頁；『神学世界』第4巻第3号（1919年5月）、広告 5頁；『神学世界』第4巻第4号（1919年7月）、広告 2頁；『神学世界』第4巻第5号（1919年9月）、広告 2頁。

[41] 張時英に関する研究としては、金希信「華僑, 華僑 네트워크와 駐韓使館」『中国史研究』第89輯（2014年4月）、285-332頁；同「在朝鮮 中華商会의 設立過程과 存在様式：1912-1931年 京城地域을 中心으로」、27-62頁；李正熙「植民地朝鮮における華僑経済に関する研究(1905-1930年)(下篇)：華僑布木商の商業活動を中心に」『京都創成大学紀要』第6巻（2006年）、27-54頁などがある。

[42] 金希信「呉武壮公祠의 由来와 韓国社会에서의 位相」『中国学報』74（2015年）、430頁。

[43]「淑明女學校 落成式」『東亜日報』1920年6月16日、3頁；「天道教會堂工事의經過狀況」『朝鮮日報』1920年12月18日、4頁。

[44] 朝鮮総督府『朝鮮に於ける支那人』1924年、61頁。

[45] “By Their Works Ye Shall Know Them,” 103.

[46] H. G. Underwood, “Annual Report,” *KMF* (Nov. 1910), 286.

ー・チャンは、自らの信仰に基づき、コレラや飢饉などに対する各種の寄付活動にも活発に参与し、特にキリスト教関連の寄付活動に積極的であった。たとえば、1911年にYMCAが会館に体育館を増築する上で不足していた5000ドルを募金した際、ハリー・チャンが一番に進み出て募金額の10分の１に当たる500ドル（1000円）を寄付した[47]。また、朝鮮中華基督教京城教会が1919年に土地と建物を西小門洞に購入した際、総経費6000円のうちの500円をハリー・チャンが寄付している[48]。彼がこのように宣教団体と教会のために助けの手を差し伸べたことは、宣教師関連の会議の報告書や宣教師が刊行していた雑誌などを通して宣教師社会に広く知られていた。

宣教師たちは、ハリー・チャンがプロテスタント信者であったことを知っていたのであり、彼の教会関係の寄付活動および建築工事について、*KMF*や会議の席上で何度も言及している。当時建築に関わった宣教師たちが、不慣れな環境において見知らぬ業者と仕事をすることを通して多くの試行錯誤を経験する中、*KMF*などを通して自分たちが関わった業者や経験などを詳細に報告し、特定の人物や会社を推薦するなど、建築界の情報を積極的に共有しようとしていたことを考慮すれば[49]、ハリー・チャンの名前と写真が収録された多くの文章は、事実上、朝鮮の建築界における大きな顧客であった宣教師たちにハリー・チャンの会社を広報するためのものであったと見ることができる。そしてこのような理由で、1921年に亡くなるまで[50]、張時英はその売上において第二位の長発隆や黄昇号に10倍以上の差をつけることができたのであろう。

## Ⅳ．王公温の信仰と建築活動

ハリー・チャンが亡くなった後、プロテスタント関連の建築施工の仕事は、1920年に設立された新生の請負会社に殺到した。先に引用した1924年の朝鮮総督府の記録によれば、第一次世界大戦以降の建築工事の減少に伴い、転業あるいは廃業する者が増えていったが、調査時点（1923年末～1924年初頭）でソウルにおいて営業していた代表的な中国人の建設請負業者としては、福音建築業、雙興号、司徳紹、江兆仁などがあった。これらの会社のうち、課税標準額が最も高かった会社は10万円の福音建築業で、雙興号が３万円、司徳紹が１万円、江兆仁が8000円と続いた[51]。すなわち、1920年代のソウル地域の中国人の建設請

---

[47] “How the Lord Sent Money for the YMCA,” *KMF* (Feb. 1911), 54; “By Their Works Ye Shall Know Them,” 103.

[48] Charles Allen Clark, "Report of the Work for Chinese in Chosen," *Minutes of the Twenty-Seventh Annual Meeting of the Council of Presbyterian Missions in Korea* (1919), 22.

[49] 代表的な例としては、先に触れたThompsonの“A Constructive Retrospect”やM. L. Swinehart, “Contracting in the Orient,” *KMF* (Oct. 1926), 208などを挙げることができる。

[50]『東亜日報』1921年6月15日、2頁。

[51] 朝鮮総督府『朝鮮に於ける支那人』1924年、61頁。

負業者のうち、売上額が最も大きかったのは「福音建築業」であったが、同社はその名前からも推察されるように極めてキリスト教的な会社であった。この会社の経営者は、方之日牧師の回顧に登場する「王公温」という人物であった。

## １．王公温の信仰とキリスト教企業・福音建築廠

王公温（1892～1982年）は、山東省蓬莱県の人であり、清末の1906年頃に単独で朝鮮に渡った[52]。朝鮮において王は、すぐに大工として建築関係の仕事を始めたようであるが[53]、王公温が勤めた会社は同郷人であったハリー・チャンの会社に他ならなかった[54]。

王公温は、1918年にソウルで開催されたブックマン（Frank Buchman、戚伯門）牧師による中国人向けのリバイバル集会に参加したことがきっかけとなってキリスト教を信仰するようになり[55]、その後、朝鮮中華基督教京城教会に出席するようになって受洗している[56]。

その後の彼の生涯は、信仰生活と社会生活が一致したキリスト者企業家のそれとなった。彼の信仰は積極的な教会活動と社会事業活動において現れると共に、福音建築廠という会社の経営においても現れた。

王公温が自らの会社を設立する以前、洗礼を受けて間もない1919年に京城教会は土地と建物を購入したが、その購入費の７分の１に当たる金額を王が負担したとの証言がある[57]。その証言から、ハリー・チャンの会社で大工として働いていた20代の王はかなりの富をすでに蓄えていたようであり、教会員となった直後から自らの収入のうちのかなりの部分を教会に献金していたことがわかる。また王公温は、教会の事務を実質的に担うことで、教会の仕事も担っていた。たとえば、日本語にも精通していた王公温は、1927年から福音建築廠を経営すると共に、教会の幹事の仕事も兼任している[58]。また1928年と1929年には、在朝プロテスタント宣教部公議会の中国人活動委員会の会計を務め、宣教師たちを助けた[59]。こ

---

[52]「外國人士의 朝鮮生活觀」『東亜日報』1936年1月1日、3頁。

[53] Mrs. C. S. Deming, “Sen Lai Tsang, Missionary to Korea,” *KMF* (April 1937), 83.

[54] Edith M. Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," *Minutes of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea* (以下、*Federal Council Minutes*) (Sept. 1921), 43.

[55] 錢在天「朝鮮中華基督教會之經過與現況」『中華基督教會年鑑』第10巻（1928年）、135頁；Deming, "Union Missionary Work Among the Chinese," *Federal Council Minutes* (Sept. 1921), 43.

[56] Mrs. C. S. Deming, “Sen Lai Tsang, Missionary to Korea,” 83.

[57] 吳學古「漢城中華基督教會簡史」、59頁。

[58] 錢在天「朝鮮中華基督教會之經過與現況」、135頁。

[59] Mrs. C. S. Deming, “Chinese Christian Church of Korea," *Federal Council Minutes* (Sept. 1928), 30. 在朝プロテスタント宣教部公議会の「中国人活動委員会」に関しては、李恵源「在韓 欧美 宣教師의 朝鮮中華基督教会 支援 事役에 대한 一考察：1902-1937年 宣教部公議会들의 活動을 中心으로」『韓国基督教와 歴史』第49号（2018年9月）、5-45頁を参照のこと。

のような様々な活動もあって彼は、1929年に京城教会の二人目の長老として按手を受けた[60]。その後20年余りの間、京城教会の幹事および長老を務め、教会内においては謙遜で誠実であり、人当たりのよい人物であるとの評を得、教会の働きを家庭よりも優先したと記録されている[61]。

王公温は、教会内においてだけでなく、その信仰に基づき、教会外においても救済活動などに積極的に関わった。たとえば、1930年12月に王公温は、朝鮮孤児救済会の特別会員となり、100円を寄付している。当時の普通会員の１年分の寄付金は12円であったので、王公温が出した金額はその８年分以上に相当するものであったことになる[62]。また1933年に朝鮮孤児救済会が踏十里に朝鮮孤児院を設立した際にも、王公温は個人の寄付者のうちでは最も大きな金額である50円を寄付した[63]。

寄付行為など社会活動に王公温が関わったことを示す具体的な記録は小さな記事２本のほかには見つかっていないが、彼が社会事業に高い関心を示して関わったとの記録をイーディス・デミングが記しており[64]、また植民地支配からの解放後10年余りの間、旅韓中華基督教関係の財団法人の理事長を務めた白永燁牧師も、「王長老は神さまを愛し、人を愛する一方、終始一貫してお金は重視せず、他人を助ける際には全力を尽くさないことがなく、キリストの愛が至るところに現れでていた人であった」と評しているのを見ると[65]、実際に関わった各種社会救済活動はさらにあったであろうことが推測される。

福音建築廠という会社の経営を通しても王公温はその信仰を示している。王は、28歳となった1920年にハリー・チャンの会社から独立して自らの会社を設立したが、その名を福音建築廠（The Chinese Gospel Building Association）としている[66]。同社は、同じ京城教会の教会員であった車道心（漢方医）とチョ氏（Mr. Tsao、曺氏と推定される）の投資を受け、合資の形で設立された合股会社であった。12株に分けられた会社の股票（株）のうち、５株は会社経営のパートナーたちが所有し、５株は他の株主たちが、１株は投資することを望む職工たちが、そして最後の１株は朝鮮中華基督教会が所有していた[67]。

福音建築廠という社名にもよく表されているように、同社を通して王は、そのキリスト教的なアイデンティティを遺憾なく発揮しようとした。まず先に見たように、会社の持ち株の

---

60 吳學古「簡述王公溫長老遺事」、16頁；Edith M. Deming, “Committee on Work Among the Chinese,” *Federal Council Minutes* (Sept. 1929), 29.

61 吳學古「簡述王公溫長老遺事」、16頁。

62「孤兒救濟 爲해 百圓을 義捐, 中國人 王氏가」『東亜日報』1930年12月18日、7頁；「朝鮮孤兒救濟會에서 男女討論會開催」『朝鮮日報』1930年12月12日、3頁。

63「朝鮮孤兒院踏十里에新築」『東亜日報』1933年5月29日、3頁。

64 Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43.

65 吳學古「簡述王公溫長老遺事」、16頁。

66 Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43.

67 Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43.

うちの一部を教会に献納し、さらに王公温と車道心は自分たちの取り分のうちの10分の１を教会に献金した。この会社の役員（directors）はキリスト教徒でなければならず、中華教会の主任牧師に絶えず助言が求められた。また日曜日には、会社所属の職工たちの労働を禁ずる一方で、彼らが教会に出席すれば日当を支払った。会社は職工たちの酒や賭博を禁止し、社牧（会社付の牧師）ともいえる説教者を置いて職工たちの面倒を見させた。説教者は、昼食時間と夜に職工たちに文字を教え、毎朝礼拝をささげた。1920年に福音建築廠が東洋宣教会の聖書学院の建物を施工した際には、毎週日曜日に職工たちのために午後礼拝が行われた[68]。このように福音建築廠は、キリスト教系の企業は誠実に働きながらも主日を遵守することができる、ということを証明しようとした[69]。

会社の設立目的のうちの一つは福音を伝えることであったので、職工たちに福音を伝えるために多様な方法が用いられた。その結果、職工の中で教会に出席する者の数が増え、1921年９月に京城教会が60円の鐘を購入するために特別献金を募った際、そのうちのかなりの部分は職工たちの献金で賄われた[70]。

朝鮮にあるすべての華僑教会を支援しようとした福音建築廠は[71]、朝鮮中華基督教会の献金のうち最も大きな部分を担い、経済的な支援を惜しまなかった。実際、1927年に京城教会を訪問した中国の中華基督教会幹事の銭在天は、次のように報告している。

> 私が決して忘れることのできないことがあるが、それは、教友たちが多数参与して設立された福音建築廠のことである。毎年の献金のうち、約10分の１を担っているが、その金額が2000元である場合もあり、5～600元である場合もある。今年〔1927年〕は、約3000元が可能であろうとのことである。主の恵みと祝福によって会社が順調に運営されており、理事〔王公温〕が非常に情熱的な人である[72]。

また1930年度の記録を見ると、朝鮮にある６箇所の中華教会の１年の献金総額は3,480.56円であったが、その約４分の１に当たる981.56円が福音建築廠からの献金であった[73]。1931年の場合、京城教会の１年の献金額1,683.02円のうち、福音建築廠の献金額はその半分以上となる897円であった[74]。

---

[68] Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43-44.

[69] Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 44.

[70] Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43.

[71] Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 44.

[72] 錢在天「朝鮮中華基督教會之經過與現況」、135頁。

[73] Margaret J. Quinn, "Report of the Committee on Work among the Chinese," *Federal Council Minutes* (Sept. 1930), 28, 46.

[74] Margaret J. Quinn, "Committee on Work among the Chinese," *Federal Council Minutes* (Sept. 1931), 32.

毎月の献金だけでなく、教会がまとまった資金を必要とする際にも躊躇することなく支援している。京城教会は、1919年に教会の土地を西小門洞に購入した後、1923年に教会の後方にあった小さな土地を購入し、教会の拡張工事を行っている。その際にかかった費用のうちのかなりの部分を占める約１万3000円を教会は福音建築廠から借り、それを月賦払いで返済した[75]。

このように会社を設立して教会を支援し、福音を伝えようとした王公温は、1950年に朝鮮戦争が勃発した後、40年余りを過ごした韓国での生活と事業を整理して台湾に移住したが、その際、福音建築廠があった自らの所有地である貞洞26-2番地（143坪）の土地と建物をすべて財団法人中華基督教会維持財団に寄付している[76]。これは、現在の旅韓中華基督教漢城教会（貞洞25-2番地、京城教会の後身）の前方に位置する教会付属の愛華図書館が建つ土地である。会社を経営することができなくなるや、会社の財産をすべて教会に献納したことを見ると、教会を支援するために福音建築廠を設立したというイーディス・デミングの証言[77]が決して誇張されたものではなかったことがわかる。

## ２．福音建築廠が施工した建物と在朝宣教師たちとの関係

このようにキリスト教企業であることを積極的に標榜した福音建築廠が施工した建物には果たしてどのようなものがあったのであろうか。現在まで記録によって確認することのできる建築物には、次のようなものがある。

① 京城聖書学院（1921年）：1911年に武橋洞の伝道館から始まった東洋宣教会の聖書学院は、1921年に建物を「高陽郡龍江面阿峴里に新しく建築」し、移転している[78]。その際、当時の総理兼院長であったキルボーン（E. A. Kilbourne）宣教師は、建築施工を王公温に委ねた。これは、福音建築廠の設立（1920年）以来、最初に請け負った大規模工事であったと考えられる。工事費は10万円であり、1920年の春に契約が交わされ、すぐに工事が始められた[79]。聖書学院は、1920年代のソウルにおいて明洞聖堂や鍾路YMCAと共に三大宗教建築物に数えられるほどの壮麗さを誇る建物であった[80]。

② 梨花学堂のフライ・ホール（1923年）：梨花学堂（後の梨花女子専門学校）が貞洞にあった時代に建築されたフライ・ホール（Frey Hall）も王公温が施工したものである。梨花

---

[75] Edith M. Deming, "Union Work Among the Chinese in Korea," *Federal Council Minutes* (Sept. 1923), 46.

[76] ソウル特別市中区貞洞26-2番地の「土地台帳」、「建築物台帳」、「土地登記簿」、「建築物登記簿」を参照。

[77] Deming, "Sen Lai Tsang, Missionary to Korea," 83.

[78] 李明稙『聖潔教會略史』朝鮮耶蘇教東洋宣教會 聖潔教會理事會、1929年、38頁。

[79] 吳學古「漢城中華基督教會簡史」、61頁。

[80]「김정동 牧園大 教授 인터뷰：1920年代 서울 三大建築物… 옛 ‘京城聖書学院’ 헐린다」『朝鮮日報』2010年9月14日。

学堂は、校舎を拡張するために1917年に貞洞32番地にあったソンタク・ホテルを購入して使用していたが、それを取り壊して1923年にフライ・ホールを建築した[81]。1922年10月６日に定礎式が行われ、1923年９月に竣工している[82]。

③ ロシア総領事館の修理（1925年）：1925年にロシアの総領事館の建物は全面的な修理が必要となり、「修繕工事トシテハ貞洞二六居住支那人〔ママ〕王公温ニ僅二千円ノ工事ヲ托」すことになったのであった[83]。

④ 公州基督教医院付属の乳児病院（1926年）：ファウンド（N. Found）博士が運営していた公州基督教医院に1923年から派遣され、乳児の治療に尽力していたマレン・ボーディング（Maren Bording）宣教師は、1926年に同医院付属の乳児病院を新築するため王公温と契約を結んだ[84]。しかしながら公州警察署が中国人の日雇い労働者の使用を禁止したため工事は困難となった。同建物は同年６月に竣工したが[85]、王公温が工事を担いつづけたのか、あるいは朝鮮人の請負業者に工事の請負が変更されたのかについては、これに関係した宣教師たちの報告書にも記録されておらず、現時点ではわかっていない。これについては、今後の研究課題としたい。

⑤ 朝鮮基督教書会（1931年）：書会が建てた三番目の建物も王公温が施工したものである。書会は、1923年より新築計画を立てはじめ、中国上海在住の長老会宣教部の建築家グン（C. A. Gunn）に設計を依頼した[86]。1930年４月に起工され、1931年６月に竣工したが、施工は王公温の福音建築廠が請け負った。請負時の予算は６万ドルであり、その予算内に工事は完了している[87]。

⑥ セブランス病院敷地内のワイス（Dr. E. Weiss、韋恩納）宅：南大門にあったセブランス病院の建物には王公温が施工したものがいくつかあったという[88]。そのうち記録として残っているものは「韋医師」の自宅である。

⑦ 梨花女子専門学校の音楽堂（1935年）：梨花女子専門学校は、新村キャンパスへの移転のため1932年から建築工事を開始した。ヴォーリズ（W. M. Vories）建築事務所が設計を担当し、総監督はスワインハート（M. L. Swinehart）宣教師が、施工は華僑請負業者２社が

---

[81]『京城府史』第1巻、651-652頁（尹一柱『韓国 洋式建築 80年史』、72頁より再引用）；梨花100年史編纂委員会『梨花100年史資料集』梨花女子大学校出版部、1994年、811頁。

[82] 鄭忠良『梨花八十年史』梨大出版部、1967年、142頁。

[83]「露國領事館入金上容疑件(1925年12月16日)」『檢察事務에 關한 記錄 1』韓国史데이터베이스。

[84]「苦力使用不許로 工事까지中止」『朝鮮日報』1926年4月15日、2頁。

[85]「공주긔독교병원 영아부를새로셜립」『東亜日報』1926年6月7日、3頁。

[86] 이장식『大韓基督教書会百年史』大韓基督教書会、1984年、42-43頁。

[87] H. A. Rhodes, “The Chairman's Address at the Opening of the C.L.S. Building,” *KMF* (July 1931), 138.

[88] 吳學古「簡述王公溫長老遺事」、17頁。ワイス宣教師は朝鮮の解放後、中華基督教維持財団の理事となっている。

請け負ったが、新築された７棟の建物のうち３棟を王公温の福音建築廠が請け負った[89]。そのうちの一つは音楽堂（Case Hall）であり、建築費は19万9000円であった[90]。1933年３月15日に起工、1935年５月に竣工している[91]。

⑧ 梨花女子専門学校の大講堂（1935年）：エマーソン夫人が１万ドルを寄贈し、全校生を収容することのできる500余りの座席を備えた講堂が建てられたが、これも王公温が施工したものである。当時はエマーソン・チャペル（Emerson Chapel）と呼ばれていた。

⑨ 梨花女子専門学校の体育館（1935年）：王公温が施工した石造の建築物である体育館の建築費は４万1000円であった[92]。

⑩朝鮮日報社屋（1935年）：太平路の朝鮮日報社屋は1934年３月に起工され、1935年６月10日に竣工した。敷地面積1400坪の土地に建てられた鉄筋コンクリートとレンガ造りの５階建て建造物の総工費は32万円であり、当時のソウル中心街における最大規模の建物であった。この工事の「建築主体工事請負人」は、福音建築廠の王公温であった[93]。

⑪ 泰和女子館（1937年）：福音建築廠が施工を請け負ったが、中止となったケースである。泰和女子館は、1933年に第４代館長としてビリンスリー（Margaret Bilingsley）が着任した後、本館の新築工事に着手した。設計はヴォーリズが担当し、施工は公開入札を実施した結果、王公温の福音建築廠が落札した[94]。このように建築計画は順調に進んでいたが、建設工事が始まる前に中断されることになる。それは、請負契約を結んで半月が経った1937年７月に日中戦争が勃発し、福音建築廠が雇用していた中国人建設熟練工の大部分が中国に帰国したためであった[95]。これに関して、ビリンスリーは、次のような文章を残している。

> 非常に失望した夏でした。昔の建物を取り壊し、新しい建物を建てるための基礎的な準備に着手し、私たちの希望が実現すると思われた瞬間、工事監督者である王氏が工事を放棄し、中国に立ち去ってしまいました。王氏と共に工事を行っていた朝鮮人が、自分が一度やってみると言いましたが、昨日になって到底できないと告げてきました。現在の状況において私たちはどのようにしなければならないのかわかりません。石工も中

---

[89] 鄭忠良『梨花八十年史』、208頁。

[90] 鄭忠良『梨花八十年史』、207頁。

[91]『梨花100年史資料集』、828-829頁。

[92]『梨花100年史資料集』、832頁。

[93]『朝鮮と建築』第14輯第9号（1935年9月）、16-18頁；「劃期的大盛儀：今日本社屋落成式 本社機의自祝飛行 空陸에亘할祝賀色」『朝鮮日報』1935年7月6日、3頁；「嚠喨한奏樂으로開式：感銘할諸位의祝辭」『朝鮮日報』1935年7月7日、1頁。

[94] 이덕주『泰和基督教社会福祉館의 歴史』、275頁。

[95] 李正熙「中日戦争과 朝鮮華僑：朝鮮의 華僑小学校를 中心으로」『中国近現代史研究』第35輯（2007年9月）、113-114頁。

国に戻ってしまったので、石工探しが困難となっています[96]。

結局、泰和女子館は、新たな施工業者を見つけることができず、設計者であるヴォーリズが朝鮮に支社を設立し、直接施工を担当することで工事を再開することができるようになった[97]。

以上のように、記録を通して確認しうる王公温関連の施工数は11件である。このうち現存するものは、梨花女子大学の新村キャンパスに建てられた３棟である。記録には多くは出てこないが、上の11件の構成を見ると、ミッション関連の大規模工事を多数請け負っていたことがわかる。また地域も、ソウルだけでなく忠清南道の公州にまで及んでいたことを確認することができる。

大規模工事を受注した結果、福音建築廠は1920年代の華僑建設請負業者の中で第一位を占めるようになり、王公温も華僑社会において指導的な役割を担っていくようになった。彼はその後、1930年代初めから京城中華商会の会長を務めているが[98]、1930年代当時の王公温の社会的地位を推し量ることのできる記事がある。それは、1936年１月１日付の『東亜日報』に掲載された「外国人士の朝鮮生活観」というタイトルの記事である[99]。それは、ソウル地域の外国人名士５名を対象にインタビューを行ったものであり、その５名とは、梨花女子専門学校校長のアペンゼラー（A. R. Appenzeller）、カトリックの司教ラリボー（A. J. Larribeau）、延熙専門学校校長のアンダーウッド（H. H. Underwood）、セブランス医学専門学校教授のマーチン（S. H. Martin）、そして「華商総会」の王公温であった。1930年代の朝鮮社会において成功した事業家であった王公温は、外国人名士のうちの一人に数えられていたのである。

王公温の名声は植民地支配からの解放後も続き、南韓華僑自治総区公所総区長、旅韓中華商会総合会理事長、華文漢城日報社副社長などの肩書を次々に得る中、名実共に韓国華僑社会の指導者のうちの一人となっていった[100]。

ところで、1920年に設立された新生の会社であった福音建築廠が５年ほどの間で業界第一位の座に上りつめるほど多くの工事を受注し、そのことを足掛かりにして経営者であった王公温が社会的名士の列に加わることができた理由は何だったのであろうか。どのようにして５年ほどの間に業界第二位であった雙興号よりも３倍の売上高を記録することができるよ

---

96 Billingsley's letter to McKinnon, Sep. 3, 1937（이덕주『泰和基督教社会福祉館의 歴史』、278頁より再引用）。

97 *W. M. Vories and Company Architects Ichiryusha, Their Works, 1908-1983*（株式會社光陽社、1983年）、104頁。

98「人事・集會」『朝鮮日報』1934年8月14日、1頁。

99「外國人士의 朝鮮生活觀」『東亜日報』1936年1月1日、3頁。

100「華僑全體大會」『京郷新聞』1949年12月11日、2頁。

うになったのであろうか。

王公温に関する回顧録を残した漢城教会の呉学古執事は、その理由として王公温の剛直でまっすぐな品性と建築の実力を挙げている[101]。しかしながら、果たして品性や実力だけで、当時40社以上あった華僑建設請負業者の中でこのように短期間のうちに独り急成長することができたのであろうか。

福音建築廠が急成長した背景には、深く宣教師たちが関係していたことが推測される。朝鮮中華基督教会を設立・指導したイーディス・デミング宣教師は、1921年の報告書において福音建築廠と朝鮮中華基督教会との関係について詳細に説明した後、「福音建築廠の事業が繁盛すれば繁盛するほど中華教会は完全なる自立に近づいていく」とし、「会社の未来は、全くもって宣教師共同体の全面的な支援にかかっている」と強調している[102]。そして、1929年にも再びこの点について宣教師たちに次のように強調している。

> 宣教部に中国人事業の予算のうちの６分の１を支援してもらっているが、それ以外の残りの予算は、王長老が経営者であり、車長老が株主の一人となっている福音建築廠が負っています。このような理由で私たちは、どのような契約でも、あればそれを可能な限り王氏と結んでいただきたいと願っています。〔中国人〕人口が流動的であることもあり、献金だけで予算を賄うことはほぼ不可能です[103]。

このようにデミングは、数回にわたって宣教部の会議の席上で直接的に福音建築廠と朝鮮中華基督教会の自立を結びつけつつ、福音建築廠への工事の発注を訴えたのであった。在朝中国人の伝道事業が、朝鮮にあったすべての宣教部が加入していた在朝プロテスタント宣教部公議会の公式事業の一つであったこと、そのうち六つの宣教部が宣教費を毎年支援していたこと[104]、そしてその公議会全体の会議の席上において福音建築廠のことが宣伝され、請負契約を結ぶよう持続的に訴えられていたことなどを勘案すれば、在朝宣教師らがハリー・チャンの死後（1921年）、キリスト教徒である王公温が設立した福音建築廠に対して意図的に集中して仕事を依頼したと推論されうるのである。すなわち、デミング宣教師による積極的な推薦と呼びかけ、そしてそれに対する、朝鮮中華基督教会を自立させようとしていた宣教師たちの呼応が、王公温自身の品性などよりも大きな影響を工事受注に及ぼしたであろうことが推測されるのである。

---

[101] 吳學古「簡述王公溫長老遺事」、17頁。

[102] Deming, "Report of Union Missionary Work Among the Chinese in Korea," 43-44.

[103] Mrs. C. A. Deming, "Union Chinese Church of Korea," *Minutes of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church* (1929), 63.

[104] 李恵源「在韓 欧美 宣教師의 朝鮮中華基督教会 支援 事役에 대한 一考察」、26-36頁。

## V. 終わりに

以上ここまで、ソウル地域華僑の建設請負業者のミッション関連建築施工において1900～1910年代に最も多くの工事を受注したハリー・チャンの建築活動と、1920～1930年代に最も多くの工事を受注した王公温の建築活動について見てきた。中国人の建設熟練工たちは、実力や品性、価格競争力などを前面に押しだして旧韓末から植民地時代にいたる時期にかけて西洋建築の施工において抜きんでた存在となっていた。その結果、多くの華僑の建設施工会社が朝鮮に設立された。1930年10月に朝鮮総督府が実施した調査によれば、中国人の「土木建築業主、請負業主」は46名であった[105]。総督府の1924年度調査によれば、第一次世界大戦以前の土木建築がより盛んであった時期には、より多くの中国人請負業者が存在した。1900～1910年代のハリー・チャンと1920～1930年代の王公温はそれぞれ、このような熾烈な競争の中にあって他を圧倒しつつ、業界第一位の座を占めていたのである。

互いに異なる時期に売上高において圧倒的一位の座を占めた二つの会社の経営者が共にプロテスタント信者であったことを単なる偶然と見なすことはできない。当時の建築業界における最も大口の顧客のうちの一つは、宣教部と教会であった。米国南長老教会宣教部だけをとっても、同宣教部が撤退することになった1940年頃には、朝鮮半島の８地域に373棟の建物がその財産として登録されており、建物と土地を合わせた全財産の規模は、100万ドル（320万円、現在の価値で約320億円）を超えていた[106]。

したがって、全財産の規模が米国南長老教会の３倍となる300万ドルであった米国長老教会[107]やカナダ長老教会、豪州長老教会、米国メソジスト監督教会、米国南メソジスト監督教会、聖公会、東洋宣教会、救世軍、YMCAなど朝鮮で活動していたすべてのプロテスタント宣教部の財産目録を合わせれば、宣教部とその教会が建てた建物が決して少なくなかったであろうことは容易に察せられるのである。そのことに加えて、一部の宣教師たちがハリー・チャンと王公温を積極的に後押ししていたことを勘案すれば、資金力のある宣教部と宣教師、教会がかなり意図的にそれらキリスト教関係の会社に工事を発注したことで、ハリー・チャンと王公温は一気に業界第一位の座に上りつめることができたのであろうと考えられる。

本論文を通して、ハリー・チャンが張時英であったことや王公温が経営していた福音建築廠がキリスト教企業的な面が際立った会社であったこと、そして宣教師たちの後押しが彼らの建築活動および売上に直接的な影響を及ぼしていたことなどが明らかにされた。ハリー・チャンと王公温が施工した建物についての研究は、今後も継続されなければならないであろ

---

105 朝鮮総督府『昭和五年 朝鮮國勢調査報告 全朝鮮 第一卷 結果表』1934年（李正熙「朝鮮 華僑의 聖堂建築 施工活動」、57頁より再引用）。

106 韓国基督教歴史研究所編『믿음의 흔적을 찾아：韓国의 基督教 遺跡』韓国基督教歴史研究所、2013年、240頁。

107 송현강『美国南長老会의 韓国宣教』韓国基督教歴史研究所、2018年、276-277頁。

う。本論文では、彼ら華僑プロテスタント建設請負業者に関する研究を通して、中国のキリスト教徒が朝鮮の近代ミッション関連の建築に及ぼした影響とその建築活動、そして建築を媒介として朝鮮の宣教部と朝鮮中華基督教会が相互に及ぼしあった影響を明らかにすることに注力した。本研究を通して韓中キリスト教関係史を見る視野がより一層広まることを期待したい。

参考文献

「建築世界」
「基督申報」
「帝國新聞」
「東亞日報」
「神學世界」
「朝鮮と建築」
「朝鮮土木建築協會會報」
「駐朝鮮使館當-民國五年」
『明治大正期 商工資產信用錄』
『中華基督教會年鑑』第10卷
朝鮮総督府『調査資料第七輯: 朝鮮に於ける支那人』、1924年
*Minutes of the Annual Meeting of the Council of Presbyterian Missions in Korea.*
*Minutes of the Annual Meeting of the Federal Council of Protestant Evangelical Missions in Korea.*
*Minutes of the Korea Woman's Conference of the Methodist Episcopal Church.*
*Personal Reports of the Southern Presbyterian Missionaries in Korea. vol.1, no.12.*
*The Korea Mission Field.*

『大韓聖書公会史 1：組織・成長과 受難』大韓聖書公会、1993年
『安洞教会90年史』大韓예수教長老会安洞教会、2001年
金希信「在朝鮮 中華商会의 設立過程과 存在様式：1912-1931年 京城地域을 中心으로」『中國近現代史研究』第73輯（2017年3月）
金正新『韓国 가톨릭 聖堂 建築史』韓国教会史研究所、1994年
송현강『美国南長老会의 韓国宣教』韓国基督教歴史研究所、2018年
旅韓中華基督教聯合會編『旅韓中華基督教會百年紀念特刊：1912-2012』旅韓中華基督教聯合會、2013年

尹仁石「韓国における近代建築の受容及び発展過程に関する研究――日本との関係を中心として」（東京大学大学院工学系研究科博士学位論文、1990年）

尹一柱『韓國 洋式建築 80年史：洋式建築 流入과 變遷에 關한 研究』治庭文化社、1966年

이덕주『泰和基督教社会福祉館의 歴史、1921-1993』泰和基督教社会福祉館、1994年

李明稙『聖潔教會略史』朝鮮耶蘇教東洋宣教會 聖潔教會理事會、1929年

이장식『大韓基督教書會百年史』大韓基督教書會、1984年

李正熙「朝鮮 華僑의 聖堂建築 施工活動(1880年代~1930年代): 서울과 大邱를 中心으로」『教会史研究』51（2017年12月）

李正熙「中日戦争과 朝鮮華僑：朝鮮의 華僑小学校를 中心으로」『中國近現代史研究』第35輯（2007年9月）

李恵源「在韓 欧美 宣教師의 朝鮮中華基督教会 支援 事役에 대한 一考察：1902-1937年 宣教部公議会들의 活動을 中心으로」『韓国基督教와 歴史』49（2018年9月）

梨花100年史編纂委員会『梨花100年史資料集』梨花女子大学校出版部、1994年

鄭昶源「韓国ミッション建築の歴史的研究」（東京大学大学院工学系研究科博士学位論文、2004年）

鄭忠良『梨花八十年史』梨大出版部、1967年

Kornegay, Nate. "The Life and Times of Harry Chang: Builders in Early Modern Korea (1880s-1910s)." https://colonialkorea.com/2019/11/04/the-life-and-times-of-harry-chang-builders-in-early-modern-korea-1880s-1910s/?fbclid=IwAR19SkV1xO3z_hMoelhkf_o2LPV7WPoJ9d37yT5DJjcLW9Wwou4GXijUwOg.

W. M. *Vories and Company Architects Ichiryusha, Their Works, 1908-1983*. 株式會社光陽社, 1983.

Underwood, Lillias H. *Underwood of Korea*. Fleming H. Revell Company, 1918.

ソウル市 中區 貞洞 26-2番地 土地臺帳.

（イ・ヘウォン　延世大学韓国基督教文化研究所）